

ブルジェ『弟子』と19世紀末「問題小説」における師弟関係

田 中 琢 三

ブールジェ『弟子』と19世紀末「問題小説」 における師弟関係

田 中 琢 三

はじめに

ポール・ブールジェが1889年に発表した『弟子』*Le Disciple*は、現在ではほとんど読まれなくなった小説であるが、刊行当時は発売されるやいなやベストセラーとなり、作品のテーマである科学とモラルの問題をめぐって文壇で激しい論争が起きるなどスキャンダラスな成功を収めた。また、批評家のアルベール・チボーデは『フランス文学史』*Histoire de la littérature française* (1936)において、『弟子』の出版は重要な文学的事件であり、小説に思想を取り入れることによって、この文学形式の領域や方法を広げることになったと指摘している⁽¹⁾。実際、ブールジェの『弟子』は、19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期に量産された「問題小説」(roman à thèse)、つまり何らかの主義主張の正しさを例証することを目的とした思想小説の嚆矢となったのである⁽²⁾。

本稿では、まず、『弟子』における師弟の物語に同時代の思想、特に政治的イデオロギーがどのように反映され、表象されているのかを考察する。そして、同じく師弟関係をテーマとする19世紀末の「問題小説」として、モーリス・バレスの『根こそぎにされた人々』*Les Déracinés* (1897)とエミール・ゾラの『パスカル博士』*Le Docteur Pascal* (1893)を取り上げて、『弟子』と比較、検討しながら、これらの小説における師弟の物語がいかなる思想的射程を持っているのか、そして、それが当時のフランスの社会的、政治的状況とどのように関係しているのかを明らかにしたい。

I. 『弟子』について

『弟子』には「ある青年に」(A un jeune homme)と題された序文が付されている。この序文は当時のブールジェの思想的立場を知るうえで重要なテキストであるとともに、作品の意図やその正しい読み方をあらかじめ読者に伝える役割を担っている。「ある青年に」は、そのタイトルが示すように若者に向けたメッセージであり、親しい間柄で用いられる二人称単数のtuをおもに使って若い世代に訴えかけたものである。

序文の内容を以下で要約する。1871年の普仏戦争の敗北とパリ・コミュンによって傷ついたフランスを再生させるべく、自分たちの世代は努力してきた。今後は若い世代によってこの仕事が継続され、成し遂げられることを期待している。しかし、今日の若者には唯物論的実証主義の影響でエゴイズムやニヒリズムに陥る傾向がある。私はその危険性を示すためにこの小説を書いた。国家の再建のためには、こうした若い世代のモラルを正し、彼らを唯物論ではなく魂の存在を信じるように、つまり信仰へと導かなければならない。

この序文の冒頭で、プールジェのいう「青年」とは1889年の時点で18才以上25才以下の若者であることが明記されている⁽³⁾。つまり、1864年から1871年にかけて生まれ、第三共和政（1870-1940）のもとで初等・中等教育を受けて育った世代（以下「第三共和政世代」と呼ぶ）である。プールジェ自身は1852年の生まれであり、第二帝政期（1852-1870）に教育を受けた世代の作家である。この序文のなかで、第三共和政のもとで施行された普通選挙を「最もおぞましく、最も不公平な暴政⁽⁴⁾」として批判しているように、プールジェは反デモクラシーの立場を鮮明にしているが、彼のこうした反体制的な思想は、現行の第三共和政のシステムではフランスを再建できないという悲観的な認識が背景にあると考えられる。また「第三共和政世代」が危険な精神状態に陥っており、それを信仰によって正さなければならないというプールジェの主張は、共和主義のイデオロギーが反映された公教育、つまり非宗教的な教育の危険性を暗に告発しているともいえる。このようなプールジェの反共和主義のイデオロギーは、普仏戦争の敗北とパリ・コミューンに衝撃を受けて書かれたイポリット・テーヌの『現代フランスの起源』*Les Origines de la France contemporaine*（1876-1891）に代表される第三共和政期の反革命的、反近代的な保守反動思想の系譜に位置づけられる。

『弟子』は哲学者アドリヤン・シクストと青年ロベール・グレルーの師弟関係を描いた作品である。あらすじは以下の通りである。シクストの唯物論的決定論に心酔するグレルーは、貴族の娘シャルロット・ド・ジュッサを計画的に誘惑して、あたかも科学の実験をするように恋愛心理の実験を試みる。その結果、シャルロットは自殺し、グレルーも真相を知った彼女の兄アンドレ伯爵に殺されてしまう。物語の最後で、グレルーが残した手記を読んだシクストは、自分がこの若者に与えた思想的影響の責任を感じるとともに、科学的実証主義の限界を悟り、自らが否定してきた信仰へと回帰していく。

論理的思考を重ねに重ねた末に、ほとんど人間的な感情を失ってしまったこの分析家〔シクスト〕は、自らの思想が自分を支える力がないことを初めて実感して、運命という窺い知れぬ神秘の前に屈服し、ひれ伏し、崩れ落ちた。遠い昔の子供時代から思い出すことができる唯一の祈禱の文句「天にましますわれらの父よ・・・」が彼の心によみがえってきた。（中略）もし天の父が存在しないとすれば、このような苦しみの時に天の父をこれほど求め、これほど渴望するであろうか？⁽⁵⁾

このように『弟子』では、モラルなき実証主義的決定論の危険性とキリスト教信仰による救済の可能性が示されている。ただしプールジェは決定論を全否定しているわけではない。この小説で彼が批判したのは、あくまで心理学における決定論や極端な唯物論であり、テーヌが標榜した歴史法則としての「人種、環境、時代」の決定論は、『弟子』以後に明確化していくプールジェの伝統主義思想の基盤となるのである。

また、『弟子』は唯物論的科学主義の危険を説く作品であるとともに、そうした危険な思想を若者にうえつけた師の倫理的な責任をテーマにした小説でもある。つまり、グレルーの悲劇はシクストの著作から彼が影響を受けたことによって起きたのであり、その責任はシクストにあるのではないかという問いである。これは「先生は教え子の行動に責任を負うべきかどうか」というある意味で普遍的な問題を提起しているといえるだろう。

II. 『弟子』における師弟

いずれにせよ、序文で述べられているようなプールジェの政治的、イデオロギー的主張は、物語の中では直接的には表明されていない。しかし、シクストとグレルーの師弟の物語には、序文で示された第三共和政における公教育の問題が象徴的に投影されている。つまり、シクストからグレルーへと伝えられた唯物論的な思想は、第三共和政が推進する非宗教的な学校教育の象徴であり、「第三共和政世代」の若者の精神的危機は、共和主義イデオロギーに立脚した公教育の責任であるというメッセージをこの小説から読みとることが可能なのである。

師のシクストは一般にイポリット・テヌがモデルとされているが、両者の間には世代の違いが存在する。テヌが生まれたのは1828年であるが、シクストは1839年生まれという設定であり、シクストはテヌの世代ではなく、むしろ1840年生まれのエミール・ゾラの世代に属している。言うまでもなくゾラはテヌの実証主義や決定論を小説に取り入れた作家であり、テヌと同様に科学主義の信奉者でもあった。しかし、テヌが第三共和政の成立後に『現代フランスの起源』を著して反革命の保守主義に向かったのに対して、ゾラは一貫して進歩主義的な共和派であり続けた。このように、世代や政治的イデオロギーの側面から考えると、シクストはテヌよりもゾラに近い登場人物であるといえる。

また、弟子のグレルーは1865年生まれであり、プールジェが序文を捧げた「第三共和政世代」に属している。グレルーのモデルとされているのは、1888年に年上の既婚女性とピストルで無理心中を図ったアンリ・シャンピージュという当時22才の法学部の学生である。女性は死亡し、学生は一命をとりとめたが、この事件はシャンピージュの行動の動機をめぐって当時のジャーナリズムで大きな話題となった。注目すべきは、文学青年であったシャンピージュが、事件前にプールジェの自宅を訪問して自作を朗読するなど、プールジェ本人と面識があったことである。プールジェが『弟子』を書く直接の契機となったのは、自らの文学上の弟子であるシャンピージュが起こしたこのスキャンダラスな事件であり、物語には師として事件の責任を感じたプールジェ自身の心境が多かれ少なかれ反映されていると考えられる⁽⁶⁾。

この事件以外にグレルーの人物像に影響を与えたのは、シャンピージュと同様に「第三共和政世代」に属する1862年生まれの作家モーリス・バレスの著作である。バレスの小説『自由人』*Un homme libre* (1889)の主人公にみられる「自己崇拜」(culte du moi)やディレッタンティズムの傾向は、グレルーの思想や性格にも明らかにみられるものである。ただし、このバレスの作品が同時期に書かれたプールジェの小説にどの程度影響したのかは不明である。確実なことは、プールジェが1888年11月11日付の『フィガロ』*Figaro*に掲載されたバレスの「アンリ・シャンピージュの感性」《Sensibilité d'Henri Chambige》と題された記事を読んでメモを残していることである。ここでバレスはシャンピージュを「自己崇拜」を实践する知的青年として描いており、プールジェはこの記事をもとにグレルーの人物像を着想したと推測される⁽⁷⁾。

前述したように、プールジェは1852年生まれであり、世代的には1839年生まれのシクストと1865年生まれのグレルーのちょうど中間に位置している。このことは『弟子』における思想的メッセージを考えるうえで示唆的である。つまり、プールジェは前世代から受け継いだ唯物論的科学主義を否定し、それに代わるものとして伝統主義思想を示しているだけではなく、今度はその自らの思想を次世代に伝えようとしているのである。いわば師でも弟子でもあるプールジェは前世代と次世代の思想的媒介の役割を果たしており、この意味において『弟子』は、シクスト、プールジェ、グレルーの三世代の物語だといえるであろう。

Ⅲ. 『根こそぎにされた人々』における師弟

『根こそぎにされた人々』はバレスの3部作『国民的エネルギーの小説』*Le Roman de l'énergie nationale* (1897-1902)の第1巻として1897年に刊行された。ブルジェに捧げられたこの小説は、『弟子』と同様に師が弟子に及ぼす思想的影響を主題とする作品である。重要なことは、政治的イデオロギーの問題が物語中で直接的には扱われていない『弟子』と異なり、『根こそぎにされた人々』は共和主義思想やそのイデオロギーを伝える教育そのものが小説のテーマになっていることである。

物語はロレーヌ地方の都市ナンシーのリセに哲学教師ポール・ブテイエが赴任する場面から始まる。ブテイエは普遍的理性や世界市民主義といった共和主義的イデオロギーを生徒に教育し、その教えに感化された主人公フランソワ・スチュレルら7人の若者が、リセを卒業後にブテイエを追ってパリに上京する。そこで彼らは共同で新聞を発行するが、金銭的に行き詰まり、失意のなかで7人のうちラカドーとムシュフランが殺人事件を犯し、ラカドーは死刑になる。

この作品は、故郷を離れてパリに出た青年たちが、金銭と競争原理が支配する都会の厳しい現実と直面して挫折するというバルザック的なリアリズム小説であるが、他方では、バレス自身の思想の正しさを例証するために書かれた「問題小説」でもある。教師のブテイエが説く観念的で中央集権的な共和主義的イデオロギーは、ロレーヌ地方の特殊性や伝統を否定するものであり、生徒たちを故郷の土地から「根こそぎ」にする。その結果、彼らは根無し草となって都会をさまよい破滅へと向かうのである。小説の語り手は以下のように物語を総括する。

人々は7人のロレーヌ地方の若者を彼らの生まれ故郷からフランスに、そして人類にまで引き上げることによって、彼らを「理性」に近づけることになると考えた。[...] ラカドーとムシュフランに関しては、この努力は完全に失敗した。若者たちを故郷から離れるように仕向けた人々は、自分たちが魂を導く責任を負っていることを自覚していたのだろうか？自分たちの行為がもたらす重大な危険に気づいていたのだろうか？[...] 彼らが、何百年もの歴史がある住み心地の良い家から若者たちをひっぱり出してそのまま放置したために、帰る巣がない若い野獣を生み出すことになったのである⁽⁸⁾。

このように『根こそぎにされた人々』は、共和主義イデオロギーの害悪と「土地に根づく」思想の重要性を例証することを目的とした作品である。師の教育によって引き起こされた弟子の悲劇を描き、それに対する師の責任を問題にするという点において『弟子』と同じ構図を持った小説であり、ブテイエがシクストに、7人の若者がグレルーに対応している。そして、ブルジェとバレスの小説には、共和主義を否定し、伝統主義へと向かうというイデオロギー的な共通点がある。ただし、例えばブルジェの伝統主義がカトリックへの回帰であるのに対して、バレスのそれが地方主義に立脚するといったように、両作家の思想的相違もそれぞれの作品に反映されていることも指摘しておきたい。

ブテイエはオーギュスト・ビュルドー Auguste Burdeau (1851-1894) というバレス自身がナンシーのリセ時代に教わった哲学教師がモデルとなっている⁽⁹⁾。ブテイエの生まれた年は明記されていないが、モデルのビュルドーが生まれた1851年に近い設定であると考えられる。また、主人公のスチュレルは1863年の生まれで、同級生のラカドーら他の若者たちもほぼ同い年だと思われる。つまり、師のブテイエは1852年生まれ、ブルジェの世代に属し、弟子のスチュレルらは1862年生まれのバレスの世代、つまり「第三共和政世代」の若者たちであり、彼らは共和主義的な教育によって先祖代々の土地から「根こそぎに」

され、精神的アナキーに陥った若い世代のメンタリティーを体現しているのである。

プールジェが前世代の師と次世代の弟子を描いたのに対して、バレスは自分より前世代の師と自分と同世代の弟子を描いており、プールジェの小説における弟子とバレスの小説における弟子は同じ「第三共和政世代」である。プールジェが一世代上の師の立場から、弟子である「第三共和政世代」の思想的、精神的状況を描いたのに対して、バレスは、プールジェの小説から師弟の図式を借りながら、まさに「第三共和政世代」の作家として当事者の立場から自らの世代のメンタリティーを描いているのである。この意味で『根こそぎにされた人々』は『弟子』に対する返答であるとともに、『弟子』の書き直しであるともいえるであろう。

IV. 『パスカル博士』における師弟

エミール・ゾラが全20巻の『ルーゴン＝マッカール叢書』*Les Rougon-Macquart, histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire* (1871-1893)の最終巻として1893年に発表した小説『パスカル博士』は、医師のパスカル・ルーゴンと彼の姪クロチルド・ルーゴンを中心に物語が展開される。クロチルドはゾラの愛人ジャンヌ・ロズロがモデルとなっており、物語にはゾラ自身の私的体験が色濃く投影されている。また、時代設定は第二帝政期を描く『ルーゴン＝マッカール叢書』のなかでは例外的に第三共和政期の1872年から1874年までとされているが、内容的には刊行と同時代、つまり19世紀末の思潮が反映されている。

『パスカル博士』は1813年生まれのパスカルと1847年生まれのクロチルドという世代の異なる師弟の物語を通して思想的な問題を扱うという点で、プールジェの『弟子』と同じ構造を持つ「問題小説」だといえる。しかし、進歩主義的な共和派のゾラはイデオロギー的にプールジェの対極に位置する作家であり、『パスカル博士』が発する思想的メッセージも、『弟子』のそれとは正反対のものである。

この小説では、遺伝を研究する医師のパスカルが、科学の不完全さに絶望して神秘主義やカトリック信仰へ向かおうとするクロチルドを改心させ、彼女を「人類の未来は科学による理性の進歩のなかにある⁽¹⁰⁾」という思想へと導いていく。伝統的な宗教を否定して科学の未来を信じるパスカルは共和主義的なイデオロギーを、逆に科学を否定して宗教に回帰しようとするクロチルドはプールジェに代表される伝統主義的なイデオロギーを具現化する存在であるといえるだろう。パスカルとクロチルドの関係は、『弟子』においてもテーマとなった科学と宗教の対立の象徴であるが、『パスカル博士』においては、『弟子』とは逆に、科学を体現するパスカルが宗教を体現するクロチルドに勝利を収めるのである。

さらに『弟子』と『パスカル博士』の比較において重要になるのは、これらの小説における師弟の関係性である。シクストとグレルーの場合は、面識はあるものの、師から弟子への知識や思想の伝達、あるいは弟子から師への問いかけは、おもに書物や手紙といった文章を介して行われる。それに対して、パスカルはクロチルドに対話によって直接的に教えを伝えるのであり、さらに、二人の間には恋愛感情が生まれ、肉肉関係を結んで子供が誕生する。つまり、彼らの関係は『弟子』の師弟のように単なる思想的なつながりではなく、心や身体の間も含んだいわば全人格的な交流といえるものである。

また、プールジェの小説では、弟子のグレルーが師のシクストに自らの手記を託して死に、その手記から教訓を引き出したシクストが信仰に救いを求めることになる。逆に、ゾラの小説では、師のパスカルが弟子のクロチルドに自らの科学主義の思想を託して死に、その思想を受け継いだクロチルドが、師との間に生まれた子供に未来への希望を見出すのである。以下は『パスカル博士』の結末部でクロチルドがその

新生児に授乳する場面である。

小さな口がむさぼるようにいつまでも乳を飲んでいてのを感じて、クロチルドは幸せな気分になり、彼女の内面から激しい母性の衝動が沸き起こった。それは願いであり、祈りであった。それは、未知なる神への祈りにも似た、未知なる子供への祈りであった。[...] それは、民衆を疑念と苦しみから助け出すことになる救世主への祈りだった。国家を建て直さなければならないので、彼はその仕事のために生まれてきたのではないだろうか？彼は試みを繰り返し、町を再建し、迷える人々に確信を与え、[...] 正義の都市を建設するであろう⁽¹¹⁾。

こうした新生児への希望には、ジャンヌ・ロズロとの間に生まれた子供に対するゾラ自身の思いが投影されていると思われるが、いずれにせよ、このような『弟子』と『パスカル博士』の物語的な相異には、過去へと向かうブルジュエの保守反動的なイデオロギーと、未来へと向かうゾラの進歩主義的なイデオロギーの相違が顕著に表れている。他方で注目すべきは、引用文中で『弟子』の序文と同様に国家の再建の必要性が説かれていることである。ブルジュエもゾラも、世紀末のフランスが危機的な状況、つまりデカダンスにあるという共通した認識を持っていたのであり、『弟子』と『パスカル博士』は反デカダンスの処方箋としてそれぞれの解決策を示しているといえるであろう⁽¹²⁾。

V. 師弟関係のテーマの諸相

それでは『弟子』、『根こそぎにされた人々』、『パスカル博士』という19世紀末の「問題小説」において、なぜ師と弟子の関係が特権的な主題となりえたのであろうか。言うまでもなく師弟関係は古今東西の文学に見出すことができる普遍的なテーマであるが、これらの作品における師弟の物語は19世紀末フランスに特有の社会的、政治的状況と切り離して考えることはできない。すでに指摘したように、作中の師弟は各々が同時代のイデオロギーあるいはメンタリティーを具象化した存在であり、例えば『弟子』と『パスカル博士』の師弟関係には当時の科学と宗教をめぐる議論が反映されている。そして、政治的イデオロギーのレベルでは、共和主義と反共和主義の二項対立が三作品の師弟関係にそれぞれ直接的、間接的に投影されているのである。

このイデオロギイ的対立の原点には、普仏戦争の敗北に対する見解の相違があると考えられる。例えば、敗戦時に30才であり、すでに作家やジャーナリストとして活動していたゾラは、敗戦を第二帝政という腐敗した体制からフランスが共和主義国家として再生する契機として捉えることができた。それに対して、ロレーヌ地方出身のバレスは、少年時代にドイツによる故郷の占領を経験したために、敵国に対してだけでなく、敗戦に乗じて権力の座についた共和主義者に対しても強い反感を抱くことになった。バレスにとって敗戦と第三共和政の成立はあくまで悲観的な出来事であったといえる。しかし、進歩主義的な共和主義者のゾラも、伝統主義へと向かうブルジュエやバレスも、普仏戦争の敗北からフランスを再生させるという目標は一致しているように思われる⁽¹³⁾。

19世紀末にこの国家の再建という問題が再びクローズアップされた理由としては、帝国主義の植民地拡大競争による国家間の対立の激化と、それにとまなうナショナリズムの高揚、あるいは1889年のブールジュエ事件や1892年から93年にかけて政界を揺るがしたパナマ疑獄が示すように、当時政権の座にあった共和派のオポルチュニストや議会政治そのものに対する不満が高まっていたことが挙げられる。これらを背

景として、ブルジェ、バレスらの保守反動の伝統主義者が台頭し、ゾラに代表される進歩主義的な共和派との対立が生まれ、その対立はドレフュス事件によって顕在化することになるのである。

また、『弟子』、『根こそぎにされた人々』、『パスカル博士』では、世代が違う師弟の対立が描かれているが、その背景として当時流布していた「社会ダーウィニズム」の影響が考えられる。これは生物の世界と同じように人間の社会も生存競争があり、新しい勢力が登場して古い勢力を駆逐することによって進化していくという考え方であり、そこから古い世代と新しい世代の争いが必然的なものとされた。例えば、1891年に刊行されたジュール・ユレによるインタビュー集『文学の進化に関するアンケート』*Enquête sur l'évolution littéraire*においては、小説の分野では旧世代の自然主義と新世代の心理主義、詩の分野では旧世代の高踏派と新世代の象徴派という二項対立の図式がクローズアップされている⁽¹⁴⁾。そして、このような文学上の対立は、『弟子』と『パスカル博士』の師弟関係に反映されており、グレルーの悲劇はシクストが体現する唯物論的な自然主義文学の終焉を示すものとして、パスカルの科学主義はクロチルドが体現する象徴派の神秘主義的傾向に対するアンチテーゼとして読むことができる。

最後に、対立する師弟を登場させることによって得られる小説的な効果について述べておきたい。まず、二項対立の図式を設定し、一方を称揚し他方を批判することによって、善悪二元論的に分かりやすくメッセージを発信できるというメリットがある。さらに、特に『パスカル博士』において顕著であるが、師と弟子が対立することによって、葛藤や和解といったドラマが生まれ、物語に緊張感がもたらされる。このように、師弟の対立を描くことで、思想やイデオロギーの正当化に力点をおくために文学作品としては平板になりがちな「問題小説」に、ドラマティックな展開や物語のダイナミズムを導入することが可能になる。しかし他方では、こうした二項対立の物語はしばしば勧善懲悪的で紋切り型に満ちた通俗的な内容になる傾向があり、それが世紀転換期に書かれた「問題小説」の多くが今日では読まれなくなった理由のひとつであろう。

VI. 「師」としての作者、「弟子」としての読者

以下では、別の観点から19世紀末の「問題小説」における師弟関係の射程を検討したい。文芸批評家のジョージ・スタイナーが指摘するように、フランスでは「師」(maitre)という称号が独特の威厳を持ち、とりわけ「思想上の師」(maitre à penser)と呼ばれる思想的指導者が非常に尊敬されるという他のヨーロッパ諸国にはみられない文化的伝統が存在する。スタイナーは、その理由として、古代ローマの文化、特に修辞学を規範として重んじるフランスの伝統が、それを教える「師」の権威を確固たるものにしたことを挙げている⁽¹⁵⁾。いずれにせよ、価値観が多様化した現在と異なり、19世紀末フランスにおける哲学者や文学者の「思想上の師」としての権威はかなり強かったと思われる。

ブルジェ、バレス、ゾラが描く師弟関係は、この特殊なフランスの伝統を抜きにして考えることはできない。実際、彼らの小説に登場する師は、弟子に何らかの知識や技術を与えるだけの存在ではなく、弟子にその人生を左右するような思想を伝授するまさに「思想上の師」なのである。そして、第三共和政の確立期は、前述したように普仏戦争の敗北からのフランスの再建が最重要の課題であって、それに答えることができる「思想上の師」が求められていた。まず、その役割を担ったのが『現代フランスの起源』を著したテーヌや、『知的および道徳的改革』*La Réforme intellectuelle et morale*(1871)を書いたエルネスト・ルナンであり、これらの書物に影響を受けた若きブルジェはいわば彼らの「思想上の弟子」であった。

そして、そのブルジェが今度は自らが「思想上の師」となって若い世代に呼びかけたのが『弟子』の

序文である。ブルジェの認識によるとテヌヤルナンの思想はフランスを再生させることができなかつたのであり、彼はそれに代わるものとしてカトリック信仰という別の道を示したのである。さらに文学的、思想的にブルジェの弟子といえるバレスは『根こそぎにされた人々』において、今度は自らが「思想上の師」として「土地に根づく」ことによる若者の精神的混乱からの救済を説いた。他方で、ブルジェやバレスとイデオロギー的に対立するゾラも、『パスカル博士』の結末部においてフランス再生のヴィジョンとして未来の理想都市の建設を予告したのである。

このように、『弟子』、『根こそぎにされた人々』、『パスカル博士』には、作者が読者に向けて国家の再建のためのメッセージを述べ伝えるという教育的な側面がある。つまり、これらの小説は「思想上の師」を尊敬するフランス的伝統を背景として、作者が「師」、読者が「弟子」という関係が前提とされているといえるだろう。そして、この図式が顕著に表れているのが『弟子』の序文であり、そこでブルジェは、まさに教育者として若い読者に語りかけているのである。

こうした教育としての小説という観点から、ドゥニ・ペルノーは『社会化小説 1889-1914⁽¹⁶⁾』において、ブルジェの『弟子』を世紀転換期に多く書かれた「社会化小説」の最初の作品として位置づけている。ペルノーのいう「社会化小説」(roman de socialisation)とは、学業を終えて社会に出ようとする若者を「社会化」つまり社会に適応させるべく、彼らが進むべき道を教示するために書かれた小説である。内容的には主人公の若者が人生でさまざまな体験を重ねる姿を描く一種の教養小説であり、教育的、教訓的な色彩が強いことが特徴である。

また、ペルノーは世紀転換期にこのジャンルの小説が流行した背景として、当時の教育システムの問題を指摘している⁽¹⁷⁾。まず第三共和政期に行われた大学改革によって大学生の数が飛躍的に増えたが、その反面、バカロレアや学位を取得しても就職できない若者も多くなった。また第三共和政のリセの教育が社会生活に役立つような実践的な内容ではなかったこともあって、学歴はあるが無職で社会に不満を持つ若者、あるいは実社会に不適応な若者が大量に生み出されることになった。これらの若者は社会の脅威とみなされ、シャンピージュ事件などの若者による殺人事件やテロ事件がジャーナリズムで話題になっていた。ペルノーによると、このような若年を社会に順応させる手立てとして「社会化小説」が必要とされたのであり、ある意味では学校教育の不足を補う役割を担っていた。つまり、このジャンルの小説は宗教的な道徳教育が欠如した第三共和政の公教育に対するアンチテーゼでもあったといえる。

中年の医師を主人公にしたゾラの『パスカル博士』は「社会化小説」とは言い難いが、ブルジェの『弟子』は唯物論に影響されたインテリ青年の破滅を描きながら、作者が若者が進むべき信仰への道を示すという点において「社会化小説」の先駆的な作品である。また、バレスの『根こそぎにされた人々』も共和主義イデオロギーによる教育を批判しながら、現実社会における若者の人生経験と挫折を描くという教養小説的な側面においてこのジャンルの典型的な小説であるといえる。ペルノーのいう「社会化小説」とは「問題小説」の一ジャンルであり、いわば若者向けの教育的な「問題小説」なのである。

指摘すべきは、「社会化小説」がターゲットとした読者層が教養あるブルジョワの若者に限定されていることである。このジャンルの小説は、『弟子』のグレルーのように同時代の文学や思想に影響される若いインテリ、あるいはリセや大学を卒業したものの「社会化」できない青年を読者として想定しているのであり、決してプロレタリアの若者に向けて書かれたものではなかった。このことは「社会化小説」の保守的性格を示しており、当時のブルジョワ中心の社会を維持していくために、フランスの将来を担うべきブルジョワの青年を教育し、彼らを既成の社会に順応させていくことが、このジャンルの小説に課せられた潜在的な役割であったといえるであろう⁽¹⁸⁾。

おわりに

『弟子』にはシクスト以外にもグレルーの師といえる人物が登場する。それは自殺するシャルロット・ド・ジュッサの兄であり、物語の最後で妹の復讐のためにグレルーを射殺するアンドレ・ド・ジュッサ伯爵である。グレルーより10才ほど年上のアンドレ伯爵は、激しい戦闘を体験してきた現役の軍人で、逞しい肉体と強い意志の力を持つ王党派の愛国主義者である。内向的でもっばら思想の世界に生きるグレルーは、自分とは対照的なタイプのアンドレ伯爵に対して反感と羨望の入り混じった複雑な感情を抱く。アンドレ伯爵は現実的な行動を第一とするエネルギーに満ちた人間であり、シクストやグレルーの知性偏重主義のアンチテーゼとしての反知性主義を体現する存在だといえる⁽¹⁹⁾。

グレルーにとって、シクストは「思想上の師」であるが、アンドレ伯爵は軍人的なモラルに基づいた行動の美学を体現するいわば「行動上の師」である。そして、アンドレ伯爵がグレルーを殺すという物語の結末は、ドラマチックな効果を生み出すだけではなく、観念的な思想に対する現実的な行動の、あるいは知性のデカダンスに対する肉体のエネルギーの優越を象徴的に示すものでもあると解釈できる。また、後にプールジェ自身が、アンドレ伯爵がそうであるように右翼の王政主義者になっていくという事実からも、この登場人物が作者の代弁者であり、グレルーあるいは若い読者が従うべき本当の師として描かれているといえるだろう。

このように『弟子』では、シクストとグレルーの師弟をいわば超越する存在として反知性主義とエネルギーを象徴するアンドレ伯爵が登場するが、似たような図式はバレスとゾラの小説にも見出すことができる。『根こそぎにされた人々』では、プティエの教育に取って代わる若者たちの行動の指針として、ヴィクトル・ユゴーの葬儀の場面で描かれる群衆が体現するような無意識的で神秘的な民衆の集団的エネルギーが示され、そして次作の『兵士への呼びかけ』*L'Appel au soldat* (1900) には、そのエネルギーを具現化する人物としてプーランジェ将軍が登場する。また『パスカル博士』の最終章では、パスカルとクロルドの師弟から生まれた新生児が未来の理想都市の建設者あるいは生命力の象徴として現れる。いずれの作品においても、師と弟子の思想的ドラマを描きながら、最終的には論理や知性を超越した何らかのエネルギーを求める方向性が示されている。これは世紀末のデカダンスの傾向に対する反動であるとともに、20世紀に台頭する全体主義あるいはファシズムの萌芽とみなすこともできるであろう。このように、『弟子』に始まる19世紀末の「問題小説」は、師弟の物語を通じて同時代あるいは作者の思想やイデオロギーを映し出しているだけでなく、20世紀の潮流を予告しているという意味でも興味深いテキストであり、この側面からさらに詳細な研究を行なう必要があると思われる。

注

- (1) Albert Thibaudet, *Histoire de la littérature française*, CNRS Editions, 2007, p.454.
- (2) 文学ジャンルとしての「問題小説」については以下を参照のこと。Susan Rubin Suleiman, *Le Roman à thèse ou l'autorité fictive*, PUF, 1983. また、ベル・エポック期の小説における政治的イデオロギーの表象と師弟関係に関する先行研究としては以下がある。Pierre Masson, *Le Disciple et l'insurgé: roman et politique à la Belle Epoque*, Presses Universitaires de Lyon, 1987; Frédéric Guidon, *La Dialectique du maître et du disciple en littérature: l'exemple du roman fin de siècle (Bourget, Barrès, Gide)*, thèse présentée à l'Université de Paul Verlaine de Metz, 2011.
- (3) Paul Bourget, *Le Disciple*, La Table Ronde, 1994, p.XI.

- (4) *Ibid.*, p.XV.
- (5) *Ibid.*, p.359.
- (6) 『弟子』の成立過程については以下を参照のこと。Michel Mansuy, *Un moderne, Paul Bourget : de l'enfance au Disciple*, Les Belles Lettres, 1961, pp.481 *et sq.*
- (7) この点に関しては以下を参照のこと。*Ibid.*, pp.490-491, note 81.なおバレスの『自由人』は『弟子』の序文で言及されている。Bourget, *op. cit.*, pp.XIX-XX.
- (8) Maurice Barrès, *Les Déracinés*, dans *Romans et voyages*, Robert Laffont, coll. «Bouquins», t. I, 1994, pp.737-738.
- (9) ビュルドーは後に政界に進出し、1885年から1894年まで下院議員を務めて大蔵大臣などの要職を歴任する。小説中のブテイエも後に下院議員となりパナマ疑獄に関係することになる。『国民的エネルギーの小説』の第3巻『彼らの顔』*Leurs Figures* (1902)を参照のこと。
- (10) Emile Zola, *Le Docteur Pascal*, dans *Les Rougon-Macquart, histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. V, 1967, p.953.
- (11) *Ibid.*, p.1219.
- (12) 世紀転換期のフランスの文学的、政治的、社会的なデカダンスの風潮と当時の小説の関係については以下を参照のこと。Pierre Citti, *Contre la décadence : histoire de l'imagination française dans le roman 1890-1914*, PUF, 1987.
- (13) 普仏戦争の敗北がフランスの各世代の作家や思想家に及ぼした影響については以下を参照のこと。Claude Digeon, *La Crise allemande de la pensée française (1870-1914)*, PUF, 1959.
- (14) この点に関しては『文学の進化に関するアンケート』に付されたユレ自身による序文を参照のこと。Jules Huret, «Avant-propos», dans *Enquête sur l'évolution littéraire*, José Corti, 1999, pp.41-45. またユレのアンケートにおける文学流派と世代の問題に関しては以下を参照のこと。田中琢三「ジュール・ユレの『アンケート』における世代の問題：19世紀末の小説の状況に関する一考察」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』, 日本フランス語フランス文学会関東支部, 第19号, 2010年, 143-155頁; 倉方健作「「高踏派」の擁護と顕彰：『文学の進展に関するアンケート』をめぐって」, 同書, 157-170頁。
- (15) George Steiner, *Lessons of the Masters*, Harvard University Press, 2003, pp.92-94. [邦訳：ジョージ・スタイナー『師弟のまじわり』高田康成訳, 岩波書店, 2011年, 135-138頁] また、スタイナーはブルジェの『弟子』に言及し、この小説がポール・ヴァレリーの『ムッシュ・テストと劇場で』*La Soirée avec Monsieur Teste* (1896) など後の文学作品に及ぼした影響の大きさを指摘している (*Ibid.*, p.98. [同書, 143頁])。
- (16) Denis Pernot, *Le Roman de socialisation :1889-1914*, PUF, 1998.
- (17) *Ibid.*, pp.13 *et sq.*
- (18) ベルノーは「社会化小説」の登場と19世紀末の「知識人」の出現との密接な関連性を指摘している (*Ibid.*, pp.71-72)。ドレフュス事件を機に登場した「知識人」に関しては以下を参照のこと。Christophe Charle, *Naissance des «intellectuels» (1880-1900)*, Les Editions de Minuit, 1990. [邦訳：クリストフ・シャルル『「知識人」の誕生 1880-1900』白鳥義彦訳, 藤原書店, 2006年]
- (19) 『弟子』におけるアンドレ伯爵と反知性主義に関しては以下を参照のこと。Jean Borie, «Esquisse d'une étude littéraire et idéologique du *Disciple* de Paul Bourget», dans *Avez-vous lu Paul Bourget ?*, sous la direction de Marie-Ange Fougère et Daniel Sangsue, Editions universitaires de Dijon, coll. «Ecritures», 2007, pp.9-20.